

Ira S. Steinberg, *The New Lost Generation :
The Population Boom and Public Policy*

New York : St. Martin's Press, 1982, 160pp.

本書の著者Ira S. Steinbergは、Oberlin大学の哲学教授である。人口関係の書は、1974年に 'Population and Frustration' がある。

本書は、アメリカのベビー・ブーム世代（1950年代後半から1960年代前半）＝「新失われた世代」が持つ社会に対する意味を扱った論文集であるが、「社会的事実」、「社会問題」、「アイデンティティとイデオロギー」、「代わりの政策」、「人口政策、予測と説得」の5章からなる。第1章の「社会的事実」では、本書の題名となっている「新失われた世代」を中心に人口構造を素描する。しかし、その数字の読みとり方には、単なるデータ主導型の客観的姿勢のほか、問題発見の強い態度が感じられる。第2章では、社会病理の原因ともなるベビー・ブーム世代の特徴を前後の世代と比較して述べる。常識的な見解とされる「ベビー・ブームの後の世代は、ベビー・ブーム世代よりも、入学、就職、結婚の面で楽なライフ・コースをたどる」という考え方を修正する。その集団は、ライフ・コースの様々な段階で前のベビー・ブーム世代の強い影響を被り続ける。また、社会的な数字、たとえば、自殺率、交通事故数、非嫡出子数等の常識的な解釈の誤りを指摘する。非嫡出子数の特定年次の突出について言えば、それは、1950年のベビー・ブームたちのおとしごであることを言う。また、初婚年齢があがっていくにつれ、非嫡出子が生まれる可能性も大きくなるという人口学的視点を忘れない。また、社会的昇進については、後からくるものをばんでしまう「新失われた世代」の弊を言う。さらに、経済問題に焦点を当てては、「豊かな時代」にそのコウホートは他のコウホートに対して欲求不満のもとをつくっていることを言う。

第3章では、アイデンティティの問題＝「自分を単に個人と考えるのではなく、共通の問題や関心を持つ集団の成員と考えるようになること」をとりあげる。つまり、自分達の集団の社会的な位置付けの自覚が、喚起された行動因、独立変数となり、自分のアイデンティティを改善しようとする社会ドラマが展開されることを観察する。あるいは、デモグラフィック要因の知識や情報が、デモグラフィック行動を変化させることをいう。著者は、その微妙な、マスコミ社会の情報という第2の現実がデモグラフィック行動にどう変化を与えるかを考察する。

また、人口学的な現象に関して、理想や規範と知覚された現実との齟齬の結果、現実の方を拒絶し、理想の方を保持することがありうることをもいう。たとえば、子供の数への思い入れが、経済条件を凌ぐ場合である。

最後の4、5章では、人口の動向に影響を与える経済政策や、人口政策とその効果について論じる。たとえば、各家族の出生数の制限などの直接的な人口政策については、個人の自由や権利の尊重を考慮しすぎて、触れることが少ないのが残念であった。しかし、子供の数を単に経済システムの一要因としてとらえるのではなく、自律した単位としてとらえているのは、注目できるであろう。その際には、経済と出生の関係に関する議論とは別に、「新失われた世代」に対する特定された処方箋も忘れない。そして、その処方箋の一時的な効果だけではなく、長期にわたる継続的效果をも視野にいれてあるのがすばらしい。時間的に大きな話となっただけに、逆説的にいえば、総論のオンパレードという感も与えるが、むしろ、ここからさらに特定の問題を汲取ったり、俯瞰図として利用するには格好のものとなっていると言えるであろう。

人口政策についていえば、「最も少なく統治するものが最もよく統治する」という原則を貫くことが、民主主義社会における善意の人口政策であることを示唆する。つまり、デモグラフィック行動に、直接的な介入を下すのではなく、人口統計の情報が、人々のデモグラフィック行動にどのような影響を与えるかを考慮しつつ公開する、という戦略をよしとするものである。このことは、ややもすると国家が多面的な統計的事実から恣意的にある事実を選択しかねない危機を感じさせるが、多面的事実が真実であり、国家に良心があるならば、とらざるを得ない立場であろう。これに関して思ったことは、例えば、人口推計値や出生動向がどのように人々に認識され、どのような人口政策の変化が望まれるか、という見極めの研究が進められても良いだろう、ということであった。

(坂井博通)